

図画工作科

野 島 慎 二
中 川 佑 紀

1 図画工作科における「よりよい未来を志向する子」

私たちは、生活や社会の中で様々なものを目にして、そのよさや美しさなどを感じ取っている。造形活動の中で培った資質・能力は日常生活において、今まで気にも留めなかったものでも美しいと感じたり、おもしろいと興味を抱いたりすることができるという楽しさや豊かさの実感につながり、社会や生活の様々な場面で思考力・判断力・表現力の礎となる。

新学習指導要領では主体的・対話的で深い学びの実現が重要とされ、教科における見方・考え方を働かせることが深い学びを実現するために重視されている。図画工作科では造形的な見方・考え方を「感性や想像力を働かせ、対象や事象を形や色などの造形的な視点でとらえ、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」と定義している。また、「自分のイメージとは、児童が心の中につくりだす像や全体的な感じ、又は、心に思い浮かべる情景や姿などのことである」と、書かれている。表現及び鑑賞活動を通して造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かにかかわる資質・能力を育成することをめざしている。

そこで、本校の図画工作科では、自分のイメージをもちながら、思いとこだわりをもって表現できるようにする。思いとは、表そうとすることや表したいことである。こだわりとは、思いを形や色に表すための根拠となるものである。また、教師や友達などの他者とのかかわり合いや自己と作品とのかかわり合いを大切にしていく。かかわり合う中で思いに合うこだわりを更新できる場や、十分に試行錯誤できる場を設定する。そうすることで、子どもは、これまでとは違う意味や価値に気づき、自己や自分の作品と向き合うことにより自分の見方・考え方を深め、表現を追求し、感性を育んでいく。

以上のことから、図画工作科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる。

- ・自分のイメージを広げ 思いやこだわりをもち続ける子
- ・かかわり合う中で 新たな意味や価値に気づき よりよい表現を追求する子
- ・今までの学びを生かし これからの造形活動へとつなげる子

2 図画工作科における決める授業デザイン

図画工作科における決める授業では、題材と出合い、思いやこだわりをもって表現し、ふり返ることを大切にしていく。導入では、題材や主題と出会ったり、作例や作家の作品に実際に触れたり、作品に込められた思いを聞いたりすることで、自分のこととしてとらえやすくしていく。主題とは、子どもが表現するときの共通のテーマである。題材を自分のこととしてとらえられた子どもは、思いをもち意欲的に表現しようとするであろう。そして、子どもは思いに合う形や色を決めて表現していく。そのときに、生活経験には個人差があるため、子どもの発達段階に応じて知識や技能を習得できるようにすることで、子どもが主体的によりよく決めることになる。さらに、選択肢を広げることで、こだわりをもって表現できるようにする。

題材と出合いから自分の思いをもち、どんな形や色で表現するか試行錯誤する。形や色などで表現していくうちに、よりよい形や色などを追求し始めていく。しかし、子どもはつまづいたり、活動が停滞したりすることがある。そこで、もっと自分の思いに合う表現はないかとかかわり合う中で、友達から「思いに合っていていいね。」と共感されたり、「こうしたら、思いに近づきそうだよ。」とアドバイスされたり、「なぜ、そうなの？」と疑問を投げかけられて答えたりすることで、新たな意味や価値に気づき、より思いに合った形や色を決めることができるようにしていく。

今までの学びをこれからの造形活動へとつなげるために、思考や表現の過程を記録する。新たな課題と出会ったときに、過去の活動時の思いや表現などを思い起こすことで、これからの造形活動に生かしていく。

このような決める授業をデザインしていくことで、子どもは自分の思いに合った形や色を決めながら、よりよい表現を追求し、これからの造形活動につなげていくことで、図画工作科における「よりよい未来を志向する子」が育まれていく。

3 決める授業の手だて

(1) 学びへの原動力を形成する「決める」

形や色にこだわりをもち表現するためには、自分の思いをもつことが不可欠である。教師が子どもに思いをもたせるために、自分のこととしてとらえられるような題材や主題、材料を吟味する。そして、目的意識をもち、イメージを広げられるように題材や主題を提示する。また、視覚や聴覚だけでなく、材料の手触りなどの触覚を刺激し、「おもしろそう」「やってみよう」と、思うことができるように提示する。

さらに、鑑賞から発想のしかたや表現方法を考えさせたり、作家の作品に出会わせたりして、自分の思いをもたせられるようにする。

他にも、表現したいものに広げていくために、文字やキーワードからイメージをもたせることができるようにする。そうすることで、子どもは自分の生活と結び付けたり、ふり返ったりして言語化し、表したいことを思いつくであろう。

子どもが自分の思いをもつために、試すことができるような時間を確保する。小さめの紙などの材料を準備しておき、納得がいくまで試す活動をくり返すことができるようにする。そうすることで、自信をもって作品に取りかかると考えている。

(2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

子どもは、造形活動の中で自分の思いを形や色にこだわって表現していくうちに、よりよい表現を追求していく。子どもはつまずいたり、活動が停滞したりすることがあるので、かかわり合いの場を設定する。かかわり合いの後に、得たことを全体へと広げていく。

かかわり合いの中で効果的に自分の思いや表現方法を定めることができるように、ヒントコーナーや資料を工夫する。そうすることで、そこに集まる友達との対話からかかわり合いがうまれる。また、意図的、即応的にかかわり合いの場も設定していく。イメージを深めたり思いを明確化したりするためのペア・グループでのかかわり合いや、イメージを広げたり困り感を解消したりするための全体・フリーでのかかわり合いなどの形態についても吟味していく。

このようなかかわり合いによって得た表現方法などの新たな意味や価値を、自分の作品に反映させることができる時間を確保する。このかかわり合いと表現をくり返すことで、自分の思いがより具体的になり、形や色のこだわりも深まっていく。

(3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

自分の思いやこだわりをもって表現するために、アートブックを活用する。アートブックとは、ワークシートやアイデアスケッチ、試作、写真などの子どもの思考や表現の過程や、かかわり合いで得た表現など、新たな意味や価値を蓄積していくものである。

かかわり合いや表現する中で見つけた新たな意味や価値を残していくことで、自分の思いや作品の形や色へのこだわりに対する変容や成長に気付くことができる。

また、完成した作品をふり返るためのワークシートも蓄積していく。素直に感じたことやかかわり合いで生まれた言葉、作品の変容した理由などを自分のために、子どもの思いを制限することなく、文字のみならず絵や図でもかけるようにすることで、造形活動の過程を残しやすくする。

これらの手だてから、子どもは今までの学びを生かし、これからの授業、次の題材や学年、将来の生活にもつなげていくことができると考える。